

第9回合同カンファレンス

第1回ビデオ研究授業

11月28日(木)、和歌山大学図書館マルチルームにおいて、ビデオ授業研究と研究協議①を行いました。これは初任者が設定研究課題にもとづく授業の様子をビデオに収め、20分程度に編集して持ち寄り、全員で視聴して研究協議を行うプログラムです。今回は3名の小学校の初任者が実践報告を行いました。



まず、2年生を担当する初任者から、『考えを聞いて伝え合う児童の育成～算数科を通じて～』を課題にした算数のかけ算の授業の発表がありました。研究協議では、「先生は発表を聞いている周りの子どもたちの『なんで?』『わからん!』というつぶやきを敏感にキャッチし、そこから子どもたちの考えを広げ深めており、教師の姿勢について学んだ。」「『工夫して考える』という授業のねらいを達成するには、出てくる考えを予想し、机間指導のときに出てきた意見を確認し、発表の際には意見を出すタイミング等を工夫しながら、子どもたちの考え方を整理していくことが大切ではないか。」など鋭い意見が多く出されました。



続いて、5年生を担当する初任者から、『仲間の考えを認め、自分の考えを表現できる子』を課題にした、理科におけるものものつけ方の授業についての発表がありました。研究協議では、子どもの考えを引き出し広めるために、「教師の出番はどこなのか」について意見交換が行われました。「『ここは大切にしたい』という授業のねらいを持ち、教師の出番を構成した授業を考えることが大切だ。」な

どの意見が出されました。

協議に参加した中学校の初任者からは、「ビデオ研究授業をしていただいたすべての先生が、『自分の考えを持ち、それを伝え合う授業』を目指して行っていることに非常に驚きました。中学校でも取り組むべき内容であると思います。」との感想が寄せられました。

最後に、同じく5年生を担当する初任者から、算数の面積の授業で、『児童自らが学習問題に取り組み、考えをクラスで発表し、それを理解、共有する』を課題に掲げた発表が行われました。研究協議では授業における「グループから全体への効果的な進め方について」を協議の柱として、効果的な教師の支援

等についての多くの意見を出し合い、その課題について深めることができました。「個人思考を充実させるために、教師の提示(ヒントを出す等)だけでなく、ワークシートや宿題の出し方、グループ発表の方法なども授業づくりの大切な要素である。」「子どもたちが内容を理解し、意見を発表し、共有するために教師は、『個別』『グループ』『全体』の課題を把握しておく必要があり『学級経営』『教材研究』『教師の支援』で授業が成り立つ。」など貴重な意見が相次ぎました。



パネルディスカッション 子どもの理解と学級づくり・発達障害への対応



午後からは、和歌山大学教育学部松浦善満、武田鉄郎の二人の教授をパネラーに迎え、寺川剛央教授のコーディネーターによるパネルディスカッション「子どもの理解と学級づくり・発達障害への対応」を行いました。

まず、松浦教授ご自身が作成に関わられたNHK編集「荒れる学校」のビデオにより、実際の教育現場で起こっている困難な状況について松浦先生からの解説により視聴し、その後、武田教授より特別支援教育の視点からその解説と指導のポイント等について講義が行われました。初任者からは、「ビデオは衝撃的な内容であったが、子どもの荒れに対応するには、担任一人で解決するのではなくチームワークが大切だと学んだ。」「武田先生の講義では発達障害の背景と原因を分かりやすく説明して頂いた。集団への不適応行動がある子どもには、「叱らないけど譲らない」ということを意識して関わるのが大事で、引きこもり・不登校の子どもに対しては『提案・交渉』という細かい取り組みをしていくことが大切であることを教わった。実践により活かしていける内容であった。」などの感想が大学に寄せられました。

第9回教育フォーラム

シンポジウム「初任者研修高度化モデルの取組から」 初任者が取組の中間報告!

12月7日、和歌山大学教育学部・和歌山県教育委員会連携協議会の第9回教育フォーラムが県立図書館で開催され、高度化モデル事業が中心的なテーマに取り上げられました。

開会式では永井邦彦学部長より、「このモデル事業は昨年8月に出された中教審答申の具体化であり、大学と教育委員会との連携・協同による初任者研修の高度化を目指しており、ミッション再定義における教職大学院の設置につながるもので

ある。」「初任者には開講した4月に『教えられるのではなく、自ら学ぶ力を身につけてください。』とお願いし、着実に成果を上げてきた。今日はその中間報告であるが、3月末にはもっと大きな成果を報告できると思う。」との挨拶がありました。今回のフォーラムのテーマは、「『学び続ける教師』の養成と支援－教員養成からミドルリーダーの育成を視野に－」で、前半は県教委との連携の上に大学が取り組んでいる初任者研修の高度化モデル事業をめぐって、文部科学省教員養成企画室長佐藤弘毅氏や、県教育委員会学校教育局長岸田正幸氏らを交えたシンポジウムを開催しました。県内外の教育関係者180人余が出席し、熱気のある有意義なフォーラムとなりました。

続いてのシンポジウムでは、川本治雄教授（モデル事業責任者・副学長）より「物語化・凝縮化・社会化」という、基本的コンセプトについての報告が行われました。続いて、中央教育審議会委員を務め、この事業の創始者的役割を担う岸田局長より、この事業が生み出された意義について答申や和歌山県の現状分析を交えて報告がなされ、さらに、細田能成客員教授より合同カンファレンスと校内カンファレンスの現状と課題についての話がありました。次に初任者を代表して、紀伊コスモス支援学校の瀬角順平教



諭が中間報告を行いました。その中で『大切にしたいサイクル』という図が紹介され、「実践→振り返り→考える→気づく→改善→実践のサイクルが研修に織り込まれており、教育的力量の向上に繋がっている。」「このサイクルでスパイラル的に力量を高めていくことが『学び続ける教師』の基礎的な力となる。」と力強い発表がありました。

最後に、文科省の佐藤室長から「中教審答申の『学び続ける教師像』を支えるためには、研修に

については実践的なものも含めレベルアップを図ることが重要である。省察的教師を育てるためには大学と現場を結んでの理論と実践の融合が不可欠である。その意味でこの和歌山の取組は大変注目しており、全国の範となってほしい。非常に期待している。」と熱いエールが送られました。

分科会で3名の初任者が中間報告



後半は教員の養成—採用—研修という、優れた教師を育てる一連の取組に対応した三つのテーマで分科会が行われました。第三分科会では「高度化モデル事業の課題を深める」というテーマで、18名の初任者を代表して3名が各自の実践を交えながら発表しました。

最初に、紀伊コスモス特別支援学校の藤井結子教諭らが、「私にとって高度化モデル事業での学びはとても楽しく、他校種の先生方との交流が新たな気づきと学びを生み、さらに大学の先生方の知見に触れることにより学びが深くなり楽しい。」との報告がありました。

続いて和歌山市立藤戸台小学校の田中愛弓教諭は、「私は授業で勝負できる教師、一人一人を大切にしたい学級経営のできる教師をめざし教師になりました。この高度化モデル事業は、その学び続ける教師としてのスタートに最適と考え参加を決意しました。」とその動機を語り、子どもと自己の変容について報告しました。また、和歌山市立西脇中学校の上西健太教諭は、「大学院の高度な授業を受けられることがこの事業の魅力と感じ参加した。」「大学の先生の支援により今後も校内カンファレンスや合同カンファレンスを通して学びを深めたい。」と抱負を述べました。初任者赴任校の校長先生からは「この事業に参加している初任者はすばらしい成長をしている。」と評価をいただき、最後に岸田局長からは、「皆さんの成長を見守ってきた一人として、今日の発表を聞いて、一言で言えば感無量です。」と賞賛の言葉をいただきました。

続いて和歌山市立藤戸台小学校の田中愛弓教諭は、「私は授業で勝負できる教師、一人一人を大切にしたい学級経営のできる教師をめざし教師になりました。この高度化モデル事業は、その学び続ける教師としてのスタートに最適と考え参加を決意しました。」とその動機を語り、子どもと自己の変容について報告しました。また、和歌山市立西脇中学校の上西健太教諭は、「大学院の高度な授業を受けられることがこの事業の魅力と感じ参加した。」「大学の先生の支援により今後も校内カンファレンスや合同カンファレンスを通して学びを深めたい。」と抱負を述べました。初任者赴任校の校長先生からは「この事業に参加している初任者はすばらしい成長をしている。」と評価をいただき、最後に岸田局長からは、「皆さんの成長を見守ってきた一人として、今日の発表を聞いて、一言で言えば感無量です。」と賞賛の言葉をいただきました。



第10回合同カンファレンス

2学期を省察して3学期へ!

12月26日(木)、和歌山大学図書館マルチルームにおいて、第10回合同カンファレンスを実施しました。

先ず、9月からの教育実践を振り返り、①子どもたちが学校行事に意欲的に取り組むために、教師がどのように支援を行ってきたか。②授業づくり、教師指導力の向上が求められる中、実践していく上で大切にしてきたポイントは何か。という2つの柱に沿って、3つのグループに分かれて協議を行いました。

①の柱について中学校の初任者は、「行事に子どもたちが意欲的に取り組むためには、まずは行事に入る前の事前指導が重要であると感じました。目標を自分たちで持たせ、その目標を達成するための計画を子どもたちが主体となって考えることにより、行事は自分たちで作りに上げるのだという意識を引き出すことができるとわかりました。」という気づきが述べられました。また、小学校の初任者からは、「『この行事を通じて子どもたちに付けたい力は何か』を念頭において行事を計画していくことの大切さを感じました。また、今回の協議の中で、他校種の先生方の実践から、『安全性』『見通し』『男女間の協力』という新しい視点での課題を知りました。来年以降は、新しく得た視点を取り入れながら、計画的に行事に取り組んでいきたいと思えます。」という感想が大学に寄せられました。②の柱について、「1学期には気付くことのできなかつた点にも気づき、3学期に向けての課題もみつけることができました。1学期は視覚教材等を用いた興味関心のもてる授業づくり、2学期は子ども自身が自分の考えをもち、それを述べることのできる授業づくり、そして3学期は学力定着へ向けて」という1年間の授業作りの方向性を共有した発表がありました。



助言者の久保教授からは、「学校行事の目標設定を丁寧に行うことが大切です。学指導要領の特別活動編の部分を十分に読み込んでほしい。児童生徒の自主性を大事にして、自治的な力を小中高と伸ばしていくことが大切です。そこをもっと意識してほしい。」と助言がありました。また、永井学部長からは、「皆さんの発表を聞いて4月からの成長を感じる。皆さんが体験した苦労や困難も含めてこの高度化初任研の財産を後輩に残してほしい。」とのエールが送られました。



課題解決講座1

— 大学教員による実習 —

午後は、初任者が日頃の教育実践での悩みや課題を専門分野の先生に尋ねる課題解決講座を行いました。岩野清美先生(社会科教育)、尾上利美先生(英語教育)、菅道子先生(音楽教育)、富田晃彦先生(理科教育)、林修先生(保健体育教育)の5名の先生が初任者の質問や悩みに的確に、そして教科教育の深いところ

まで踏み込んで答えてくださいました。初任者はまさに、感動と感謝の思い一杯のようでした。以下、初任者の感想をいくつか紹介します。

- 管先生から、鑑賞とその評価についてどのように行うかという点では、言葉で表現することが難しいならば体で表現、絵で表現、図形で表現することを学びました。表現は音楽の構成を体で感じ取っているからこそできるのであって、その音楽のねらいに合わせて、それを表現できたかどうかの評価になるということがわかりました。
- 富田先生は、知識を詰め込むのではなく体験から（遊びから）学ぶ、また教科書に載っていないことも知ること、その子の視野が広がる。天文学では、子ども自身が生活の中から想像し、そしてそれを理論的に発言することができる。そういうことから子どもは、理論的に考え、自分自身で議論を行い、結論を出すことができるようになるなど、様々な学び方があることがわかりました。
- 林先生の体育科講座で改めて思ったのが授業研究の大切さについてです。体育の授業ではどうしても授業研究がきちんとできていなくても児童はある程度動きます。しかし、中には苦手とする児童もいます。その児童を救ってあげることに体育科の本質があるように思いました。だから苦手な児童に焦点を当てながら、かつ、できる児童も退屈しないような工夫が必要だと強く感じました。
- 岩野先生の講座は非常に役立つものばかりで感激しました。私は社会の授業は苦手意識を持っていました。それがすっきりしたように感じます。「何」→「どうなっている」→「なぜ」という一貫した流れをつくる必要があるだとわかりました。
- 尾上先生の講座では、小学校の外国語活動では『慣れ親しむ』のが大事で、子どもたちが外国語にふれて『不思議だな』『日本語とちがうな』というのを感じられるようにしていくといよいよというアドバイスをいただきました。『世界に様々な言語があることを知ることは、他者を認めることになるし、子どもの世界を広げてあげることにつながる』ということがとても素敵だなと感じて印象に残っています。



校内研修活動が活性化 —授業を本音で語る「山崎北小 あすなる会」—



岩出市立山崎北小学校は児童数が808名（27学級）の大規模校で教職員も44名で、近年勤務年数の短い教員が多くなっていること、初任者が毎年複数配属されることなどから、今年度より授業力・学級経営力を培うために若手による授業研修「あすなる会」が誕生しました。参加者は初任者研修高度化モデルの2名を含む35歳未満の教員14名です。研修内容は、授業をビデオ撮影し、その授業を研修会で視聴し、授業者が設定したテーマに沿って意見の交流をしていくというものです。授業は公開しているため、研修会に出席できない先生方にも見て頂き、助言していただくこと

なっています。研修会は現在まで11回（月に1、2回）、初任の2名も7月と9月に道徳の研究授業をし、意見の交流を行いました。年齢が近い教員の実践における成功例や失敗例などの話からたくさんのことを学べたことや、学年が違っていても気軽に教え合える雰囲気づくりができたことなどが成果と言えます。

また、研修会後には悩み相談コーナーがあり、「家庭訪問で気をつけること」「机上整理術」「運動会の職員ユニフォーム作り」など、毎回いろいろな話題が出てきています。初任の先生に感想を聞くと、「若手中心で自分の考えや意見を臆することなく発言でき、自信につながった。」「個人の悩みにみんなが意見を出し合うことで共有できていくのがいい。」とのこと。今後は、初任者高度化モデル事業とよりリンクした校内研修の活性化やメンター制度の確立、校内の研究テーマ「自分の考えを持ち、表現できる子を育てる。」と関連した授業研究や、外部講師を招いての研修なども行っていきたいと考えています。



第11回合同カンファレンス

第2回ビデオ研究授業

1月23日(木)、和歌山大学図書館マルチルームにおいて、第2回ビデオ授業研究と研究協議を行いました。これは、初任者が設定した研究課題にもとづく授業の様子について20分程度に編集したビデオを視聴し、全員で研究協議を行うプログラムです。初回は、昨年11月の第9回合同カンファレンスで実施し好評でしたが、今回は小学校2名と中学校1名の初任者が自己の研究課題に沿って実践報告を行いました。

まず、小学校4年生を担当する初任者から、『子どもたちが内的葛藤を引き起こす資料選択、子どもたち自身で話し合いをすることができるようにする授業力』を研究課題にした、『キャットピープル』という資料を用いた道徳の授業の発表がありました。研究協議では、「『家族愛』を主題としたモラルジレンマの授業でしたが、道徳の授業における、終末のまとめ方の難しさを改めて感じた。さまざまな意見が子どもたちの中から出てくるのが予想されるため、一つの結論を教師が導いて、それを終末で子どもたちに提示してしまうと、展開の段階で行われた子どもたちの議論が台無しになってしまう。今回の授業では、2時間続きにして、その第1時となる本時の終末では、あえて結論を導かず、オープンエンドにした方が良かったのではないかと感じた。」「初任者夏季宿泊研修において道徳の模擬授業を受けた際に、一つの資料を読み込んだ後にもう一步踏み込んで自分の身近な人に置き換えて考えることで、より心に響くものがあることを実感した。本協議のなかでも、資料を読んだうえで自分の家族のことに置き換えると、さらにねらいに沿った内的葛藤を引き起こすことができたかもしれない。」「ねらいや展開の仕方など、軸として持っておくべきものと臨機応変に展開させていく必要がある部分があり、道徳の授業の難しさを改めて感じた。」など、初任者の成長が覗える鋭い意見が多く出されました。



続いて、小学校3年生を担当する初任者から、『事象を見たり、考えたりできる理科教材と授業作りについて』を課題にした、『電気で明かりをつけよう』という単元の授業について、導入部分で自分のハロウィンタワーを作成して電気で明かりをつける授業の発表がありました。研究協議では、「子どもたちが、いつも小学校の理科の授業が楽しかったというのがよくわかりました。子どもたちがしっかりと学習内容に入り込めるように、ハロウィンタワーなど、しっかりと導入に工夫がなされていました。」「ハロウィンタワー作りで

は、電球に明かりがつかない子どもが数人いた。子どもたちの失敗から授業を広げることで『なぜ、どうして』といった考える力を自然に作り出していることに気がついた。」などの意見が出され、協議では「板書について話し合い、改めて板書の大切さを実感しました。授業の1時間で学んだことを見て理解できる板書であること。スペースをうまく効果的に使う板書により子ども同士の話し合いの場を生み出すことができることを学びました。」との感想が大学に寄せられました。

最後に、中学1年生を担当する初任者から、「言語活動を効果的に取り入れた授業作りについて」を課題にした、英語の『道案内～道順を尋ねる～』の単元の授業実践が報告されました。協議を通じて発表した初任者からは、「日頃の授業を自分で編集し、客観的に見るという作業だけでも自分の授業を見つめ直すきっかけとなりました。英語らしい授業ができていないということに改めて気付きました。」「主に言語活動を効果的に取り入れた授業作りについてと、学習形態についてを話し合いました。『協議をしてそのまま終わりになっていないだろうか。本当に生かしているのだろうか。』というところまで踏み込んで話し合いができ、具体的な改善点を考えました。」と、学びの報告が大学に寄せられました。



研究課題について省察する

～大学教員による最終的なコンサルテーション～



午後からは、「研究課題について省察する」というテーマで、初任者各自が設定した1年間の研究課題について、その研究成果の報告と、3つのグループに分かれて年度末報告書作成に向けてのカンファレンスを行い、大学教員がコンサルテーションを行いました。

初任者からは、「自分の研究課題に対しては、『子どもの観察から学ぶ』こと、具体的には何がわかっていて何がわかっていないかを主観から客観に変える資料を積み上げることが大切だというご助言をいただきました。また、保護者と連携して一貫性のある取組を行うことで、実践に対する効果

への期待が高まるだろうというアドバイスもいただきました。これらのご助言をもとに、日々のやりとりの様子をメモで残していこうと思いました。そうすることで、今まで見えてこなかった生徒の様子や背景が見えてくるのではないかと思います。」「自分自身の普段の実践を記録し、振り返り、客観的に省察することで、子どもたちの良い変化や私自身の実践のまだまだ改善しなければならないところのはっきりしてきて、次のステップのめあてが見えてくると感じている。残りわずかな期間で出来ることは限られているが、とりわけ学級で大切にしていきたいと考え、自身の研究の中で成長を追っているN君としっかり向き合い、またN君を取り巻くクラスの子どもたちとの信頼関係をより密なものにしていきたい。」などの報告が大学に寄せられました。このプログラムにより、初任者が大きく成長している様子が伝わってくる報告でした。

2夏季宿泊研修

平成25年8月1日(木)2日(金)、和歌浦のシーサイドホテル観潮において、夏季宿泊研修を実施した。これは、1学期の教育実践並びに初任者研修による成果と課題について情報交換するとともに、今後の教員としてのあり方について協議等を行うことにより、教員としての資質・能力の向上を図ることを目的としてプログラムされた研修である。その内容を下記に示す。

8月1日(木)

- ① 1学期を振り返って～教員に求められる力～ (討論・発表)
- ② 「生徒の人権意識を高めるには」(講義) 大阪芸術大学教授 西林幸三郎氏
- ③ 初任者研修教員によるレクリエーション

8月2日(金)

- ④ 先輩にここを聞きたい～教師としての私を高めるために～
- ⑤ 道徳の模擬授 貝塚市立木島小学校長 川崎雅也氏
- ⑥ 2学期への心構え (討論・発表)
- ⑦ 講演「お母さんに捧ぐ」 紀の川市青少年センター長 秦野 修氏



まず最初に4月からの教育実践を振り返り、自分が成長できた点や課題点をそれぞれプレゼンシートにまとめ、3つのグループに分かれて討議し、自分の実践を省察するワークを行った。また、2日目には「2学期への心構え」についてのカンファレンスを行った。初任者からは、「教師の思いだけで授業を進めると、どうしても教師主体になってしまうということを痛感しました。

どの教科でも子どもの“なぜ？”に寄り添って、子どもたちが自分で学習を進めているという実感が持てるような展開にしていく必要があると感じました。」「2学期には、1学期に実践してよかった点を継続するとともに、どんどんチャレンジもしていこうと考えている。算数の習熟度別プリントを用意することなど、一工夫して授業に挑んでいきたい。」など、教師としての成長が伺える報告が相次いだ。

1日(木)の後半は、大阪芸術大学教授の西林幸三郎先生を招いて、「児童・生徒の人権意識を高めるために～子どもの心に優しさとたくましさを～」と題する講義を行った。小学校の教諭、校長、また、「大津いじめ事件」の第三者調査委員を務めた経験も交えながら子どもの人権について、「相手を尊重することで人間社会は成立っている」「人権と聞くと難しく考えがちですが、大事なことは、自分がされて嫌なことは相手にもしないこと」

など、分かり易く人権意識の高揚についてポイントを説明された。

2日目は、「先輩にここを聞きたい～教師としての私を高めるために～」と題した先輩教師との個別コンサルテーションを行った。18名の初任者それぞれが自分の課題に応じて「この先輩に是非話を聴きたい」と希望した8名の先輩教師を招き、教材づくりなどについて熱心に聞いた。初任者は「ねらいに合わせた実験人数や実験見本の使い分け、展開のアドバイスをいただいた。アイデアが閃いた時にはメモを取り授業に活かしていることや、授業でのiPad活用等、すぐに取り組みたい話を聞いて参考になりました。」と、感想を述べていた。

次に、貝塚市立木島小学校長の川崎雅也先生が、道徳の模擬授業を行った。川崎先生は、教材に「一冊のノート」を用い、中心発問に時間を費やし、子どもたちの意見をどう深めるかについて具体的に授業を提示した。初任者からは、「『よりよく生きる』ための考え、道徳の授業では何を大切に展開すればよいかを学んだ。心の動きにはいくつかの傾向があることを知り、討議したいテーマに向けて誘導するテクニックを教えていただいた。心が動くことで自然と飲み込まれている自分がいた。授業に活かしたいと強く感じました。」など多くの心を動かされたという感想が寄せられた。



最後は、紀の川市青少年センター長の秦野修先生より、「お母さんに捧ぐ」と題した講演をしていただいた。秦野先生は、理不尽な要求をする親のクレームの事例をもとに、その親の本音やクレームの背景に迫ることの大切さを強調し、学校、保護者、地域で繋がる「共育」が大切だと指摘した。先生が担任された手の不自由な生徒の話には、「自分の子どもが将来大人になったときに、自分の赤ちゃんを抱けるようにというお母さんの願いと、愛情に感動しました。また、子どもを学校生活の中で全力でサポートし、寄り添っていこうとした先生の姿勢もとても素敵だなと思いました。」などの感想が寄せられた。

この初任研高度化モデルのコンセプトは、自らの教育実践に対する省察的気づきによる「学び続ける教師像の確立」である。①と⑥は省察的気づきを促すプログラムであるが、他の提供した講義や講演等にも狙いがある。それは、「優れた教育実践から学ぶことにより、教員としての資質・能力の向上を図ること」である。講義を行ったいずれの講師も豊かな教師経験に裏打ちされた教育実践家である。初任者がその実践的指導力を一番伸ばすポイントは、「優れた教育実践に学ぶ」ことである。そのことにより、教員としてのモチベーションを高め、教育実践に一生懸命取り組む姿勢を身につけることが求められる。そして、教育実践をする中で理論的な保証が必要になる場面が必ず訪れ、いわゆる「理論と実践の往還」が始まるのである。このようなもう一つのコンセプトからこの宿泊研修のプログラムは構成されているのが特徴である。

3教育フォーラムでの取組

平成25年12月7日、和歌山大学教育学部・和歌山県教育委員会連携協議会の第9回教育フォーラムが県立図書館で開催され、高度化モデル事業が中心的なテーマに取り上げられた。

開会式では永井邦彦学部長より、「このモデル事業は昨年8月に出された中教審答申の具体化であり、大学と教育委員会との連携・協同による初任者研修の高度化を目指しており、ミッション再定義における教職大学院の設置につながるものである。」「初任者には開講した4月に『教えられるのではなく、自ら学ぶ力を身につけてください。』とお願いし、着実に成果を上げてきた。今日はその中間報告であるが、3月末にはもっと大きな成果を報告できると思う。」との挨拶があった。

今回のフォーラムのテーマは、『『学び続ける教師』の養成と支援－教員養成からミドルリーダーの育成を視野に－』である。前半は県教委との連携の上に大学が取り組んでいる初任者研修の高度化モデル事業をめぐって、文部科学省教員養成企画室長佐藤弘毅氏や、県教育委員会学校教育局長岸田正幸氏らを交えたシンポジウムを開催した。会場には県内外の教育関係者180人余が出席し、熱気のある有意義なフォーラムとなった。



シンポジウムでは、川本治雄教授(モデル事業責任者・副学長)より「初任研高度化モデルで取り組まれる研修においては、初任者自身の具体的実践の事実を大切にしたいと考えている。自分の実践を合同カンファレンスや自校カンファレンスで発表しリフレクションする。また、選択による大学院の授業参加など、様々なメニューの中でのリフレクションによる

省察的気づきが起こる。それをカンファレンスや報告書作成などのコミュニケーションを通して言語化し情報を発信することにより自分の実践の『社会化』を行う。そしてその実践を言葉で語り記録にし、その中での変化と成長があり実践的成長が『凝縮化』されていく。それを自覚することにより、ひとつのストーリーで自分の実践を意義づけるとていう『物語化』が大切である。」という、基本的コンセプトについての報告が行われた。

続いて、この事業の創始者的役割を担う岸田局長より、「私は中央教育審議会委員を務める中で、初任者段階の研修の高度化が必用であると常に言い続けてきた。和歌山大学教育学部と和歌山県教育委員会は連携事業を始めて15年になるが、ずっと私はそのことに関わってきており、和歌山でこそその初任者研修高度化モデル事業をや



りたいと取り組んできた。」「和歌山県も大量退職大量採用の時代に入り、10年で1/3の教員が20代から30代前半となる。この初任者をどう育てるかが和歌山県教育の将

来を左右する。」「現行の初任者研修は少し網羅的になっており、1年間の初任者研修を山登りにたとえると、山登りの途中でいろいろと必要な装備や食料など与えられている状況である。初任研高度化モデルは、まず山登りの体力をつけることである。別の言葉で言うと『学び続ける教師像』の資質を1年かけて養成していくカリキュラムに転換していくことである。」と述べ、この高度化モデルが生み出された意義やその狙いについて、答申や和歌山県の現状分析を交えた報告がなされた。次に、このモデル事業で初任者の指導と支援に当たっている細田能成客員教授より、合同カンファレンスと校内カンファレンスの現状と課題についての報告が行われた。さらに初任者を代表して、紀伊コスモス支援学校の瀬角順平教諭がその成果の中間報告を行った。

その中では『大切にしたいサイクル』という図が紹介され、「実践→振り返り→考える→気づく→改善→実践のサイクルが研修に織り込まれており、教育的力量の向上に繋がっている。」「このサイクルでスパイラル的に力量を高めていくことが『学び続ける教師』の基礎的な力となる。」と力強い発表が行われた。



最後に、文科省の佐藤室長から「中教審答申の『学び続ける教師像』を支えるためには、研修については実践的なものも含めレベルアップを図ることが重要である。省察的教師を育てるためには大学と現場を結んでの理論と実践の融合が不可欠である。その意味でこの和歌山の取組は大変注目しており、全国の範となってほしい。非常に期待している。」と熱いエールが送られた。

後半は教員の養成—採用—研修という、優れた教師を育てる一連の取組に対応した



三つのテーマで分科会が行われた。第三分科会では「高度化モデル事業の課題を深める」というテーマで、18名の初任者を代表して、紀伊コスモス特別支援学校の藤井結子教諭、和歌山市立藤戸台小学校の田中愛弓教諭、和歌山市立西脇中学校の上西健太教諭の3名が各自の実践を交えながら発表を行った。会場の初任者赴任校の校長先生からは

「この事業に参加している初任者はすばらしい成長をしている。」との評価を、最後に岸田局長からは、「皆さんの成長を見守ってきた一人として、今日の発表を聞いて、一言で言えば感無量です。」と賞賛の言葉をいただいた。

このフォーラムを通じて、初任者研修高度化モデルの狙いとその存在意義が再確認されるとともに、県内外の教育関係者や文部科学省に大きくアピールできたことは大きな成果であった。

4 課題研究

1) 取り組みの概要

本事業の特徴の一つとして、「学び続ける教員像」（探究力を持ち、教職生活全体を通じて自主的に学び続ける教員）の基礎的姿勢・力量形成のために、初任者一人ひとりが日々の教育活動と関わる研究課題を設定して、1年間を通じて研究することに取り組んだ。

主に、毎月の合同カンファランスを節目として、次のような手順で、各人の研究の進捗をはかり、平成26年3月13日の成果発表会に向けて研究を進めてきた。初任者18名の研究内容については、『研究課題成果報告書』をご覧ください。

(1) 第2回合同カンファランス（平成25年5月16日）

★課題研究についての趣旨説明を行った。

(2) 第3回合同カンファランス（平成25年8月20日）14時40分～16時

★「私の研究課題と研究計画」発表（全体会→グループ交流→個別作業）

「研究課題、課題設定の理由、質問・相談」を記述したプレゼンシートにもとづき発表し、大学・プロジェクト教員から指導・助言を行った。この時間帯の最後に、平成26年3月の成果発表会までの予定を説明した。

(3) 夏季合宿研修（第5・6回合同カンファランス）（平成25年8月1～2日）

★「研究課題中間報告書」作成についての説明（8月2日、合宿研修最後の時間帯）

(4) 第7回合同カンファランス（平成25年9月26日）13時～15時20分

★「研究課題について深める」（大学教員による中間的なコンサルテーション）

「研究課題中間報告書」の発表と検討をおこなった。「研究課題、課題設定の理由、これまでの取り組み、当面の取り組み、当面の目標」を記述したプレゼンシートにもとづき、①算数、数学、理科、②国語、社会、英語、道徳、③特別支援教育、の3グループに分かれて一人ずつ発表し、その後、意見交換、大学・プロジェクト教員からの指導・助言をおこなった。大学教員は教科教育を中心に10名参加した。

(5) 第9回合同カンファランス（平成26年1月23日）13時～15時20分

★「研究課題について省察する」（大学教員による最終的なコンサルテーション）

最初に、全体会において、2名の方から研究状況を発表した後に、前記（4）と同様に、①算数、数学、理科、②国語、社会、英語、道徳、③特別支援教育、の3グループに分かれて発表し、意見交換、大学・プロジェクト教員からの指導・助言をおこなった。大学教員は10名参加した（授業・会議・視察対応等のため、この時間帯にすべて参加できた者は4名）。この日に、報告書作成要領の説明を行った。

(6) 平成26年2月20日

報告書原稿締め切り。その後、『研究課題成果報告書』の編集作業を行った。

(7) 平成26年3月13日

『研究課題成果報告書』発行

2) 今年度の取り組みをふりかえって

初任者18名が設定した研究課題を概観すると、中学校教員4名はそれぞれの担当教科(数学、理科、社会、英語)、特別支援学校教員の6名は特別支援教育についてのものである。小学校教員8名について、研究課題を教科・領域別に見ると、算数科2名、理科2名、国語科1名、社会科1名、道徳1名、特別支援教育1名である。ただし、特定教科・領域における授業づくり研究というよりは、「考えを聴いて伝え合う」「子どもたち自身で話し合いができるようにする」「児童のクラス発表の在り方」「友だちの考えと交流しながら、自分の考えを深められる子」「友達の考えを認め、自分の考えを表現できる子」というように、ある教科・領域に特化した課題ではなく、豊かな交流を通して思考力や表現力を培うために特定の教科・領域に的を絞って研究したものであることが一つの特徴といえるだろう。

また、校種を問わずすべての研究が日々の授業実践と密接に結びついており、児童生徒の具体的な姿とその変容が記録されている。そして、研究課題・目的に照らしての成果と課題が分析・考察されており、初任者にとっては初めての実践研究論文であるといえる。

毎日の授業、生活指導、保護者との応答・共同、校務等の激務の中で研究課題を設定し、試行錯誤の実践を重ねながら研究を進めてきた18名の皆さんの努力を讃えたい。

今年度の反省点は、主に、私ども大学教員の計画策定の不十分さ、初任者に対する支援のあり方に関することである。率直なところ、年度当初から1年間を通した計画を策定していたわけではなく、初任者の皆さんにご苦労・負担をおかけする要因となった。

最後に、来年度に向けての改善すべき課題として、いくつか記しておきたい。

第一に、初任者研修高度化モデル事業がめざす「学び続ける教員像」を形成する上で、この課題研究と研究成果報告書の作成がどのような意義を持つのかについて、大学側の位置づけ(共通認識)を明確にすることである。そして、そのことを初任者の皆さんにできるだけ理解してもらおう手立てが必要である。

第二に、研究課題・目的の設定、研究方法について、また、研究報告・論文の作成方法について、丁寧な学習の機会(大学教員の積極的関わり)を必要としていることである。着任早々の時期という困難な条件を承知しながら、課題研究をさらに充実させるためには、この段階により時間と労力をかけることが求められているものと思う。

第三に、研究の進捗状況報告とそれに対する支援については、今年度のような全体会とグループごとの発表・検討に加えて、初任者の研究課題に関わる専門分野の大学教員が個別に指導・助言する機会を設定することである。高度化事業全体の中での時間的制約からは、前者から後者に重点を移すことが必要であると思われる。大学教員の指導・助言体制がどこまで整備できるのかは不明であるが、前記「第二に」とも関連して、5~6月にかけての研究課題設定の段階から、初任者に対する個別的な支援体制の構築が望まれる。

以上、三つの改善課題を述べたが、課題研究の取り組みに当たっては、初任者の皆さんが直面している諸課題や勤務実態を十分に配慮した上での合理的かつ妥当な目標・計画設定に留意することが大前提であることはいうまでもないことである。